

Radioimmunoscintigraphy

(553-557)

RIS (Radioimmunoscintigraphy)と銘うったセッションは今学会が初めてであり、今後、RISの日本語名を考えなければならないかもしれない。553(松島ら)は¹¹¹Inモノクローナル抗体(以下MoAbと記)が抱えている最大の問題点、肝臓への非特異的集積を解決する方法の一つとして¹¹¹InとMoAbとの間にスペーサーを入れることを検討したものである。一般に、¹¹¹InとMoAbとの結合には-N-H-, -S-S-, -C-O-結合などがあるが、演者らはエステル結合を用いることで-N-H-結合と比較して血中クリアランスがきわめて早く、しかも肝臓への蓄積が希望どおり低い標識方法を開発した。腫瘍への集積も低下しないとのことで、今後、本標識法が臨床のレベルで活用されることが望まれる。CEAの腫瘍マーカーとしての適正、さらに、それに対する抗体がRISに対しても有効であることは周知の事実になりつつある。554(渡辺ら)の発表はそのCEAのいくつもの抗体のうち、どれがRISに有効であるかを示したものである。CEAは現在その全構造が明らかにされているが、やはり、腫瘍の特異的部位を認識する抗体の方が腫瘍への集積が高いとの結果を得ていた。556の演題と併せて、将来RISに適したMoAbを選択する一つのメルクマールになると思われる。555(勝呂ら)は抗原が化学物質E3-3Sであり、これに対する抗体をRISに用い、抗原、抗体ともに素性がわかっている点に特徴がある。どのMoAbがRISに適しているかを決める指標がない間はこの攻め方は正攻法と言って良い。腫瘍と血中との比を高めるために第2抗体の投与を提唱しているが、このことは臨床への応用に際して十分考慮せねばならない点となろう。556(遠藤ら)は卵巣癌に関連した抗原CA125に対する抗体について検討した。この抗体はOC125とは異なる部位を認識する点に特徴があり、案の状RISにおいて高い腫瘍集積性が報告された。ここでも、RISの決め手がMoAbの選択にあることが確認された。これまで卵巣癌の実験モデルが少なく、本研究により確立されたこと

を付記しておく。557(森ら)は甲状腺癌に対するMoAbによる腫瘍シンチグラフィの報告であった。甲状腺癌のRISはその底辺では¹³¹Iによる治療を目的としている。腫瘍、特に、転移巣への集積性に関する検討が今後期待される。

(中村佳代子)

(558-561)

演題558-561はラジオイムノシンチグラフィの臨床的検討の報告であった。

558, 559席はメラノーマに関しての演題である。558席国立高崎放の杉山らはTc-99m標識のOnco TracTMメラノーマイメージングキットの使用経験につき報告した。抗体はFabの形で用いられている。まだ症例数が少なく、その臨床評価は今後の問題と思われた。

559席国立がんセンター小山田らはIn-111標識のMoAbを用いたメラノーマイメージングについて報告した。このZME018抗体を用いたイメージングは国内6施設での治験が終了したものであり、その成果の一部が示された。病巣の検出能は対照としたGa-67-citrateとほぼ同等との報告であった。

560席聖マ医大の高橋らはIMACIS-1(I-131標識の抗CEAと抗CA19-9 MoAbのF(ab')₂のカクテル)によるシンチグラフィの臨床検討の結果を報告した。病巣への集積率は全体で56.3%, 消化器癌で77.3%であった。陽性像は病巣の血流と壊死の存在と関連があると報告された。

561席聖マ医大の和田らはI-131抗CA125 MoAbのF(ab')₂を用いたイメージングを卵巣癌3症例で実施し、3例すべてで病巣への集積像を得たと報告した。

以上を含め、ここ数年多くの種類のラジオイムノシンチグラフィが基礎的、臨床的に検討されている。今後、他の画像診断法との比較など客観的な臨床評価が必要と思われる。

(辻野大二郎)